



# 大学教員ノート 第1回

## ー『はじまりの日』ー

石川 敬史

バス停でじっと目を閉じて冷たい風を我慢したあの時を忘れ、桜の木々に膨らむ新しい蕾をバス停でじっと見つめる——早いもので、そんな季節となった。毎年、この3月下旬という時間は、なんだかせつない。大学の研究室や教室で4年間ともに過ごした学生との別れの季節である。

＊

Aさんは、「サードブレイスと学校図書館」をテーマに卒業研究をすすめた。埼玉県内の県立高校(2校)の学校図書館へ訪問し、学校図書館の空気を丸ごと体感した経験は、まさに大学での学びの集大成につながった。表情豊かで、コツコツ勉学に取り組む心優しい学生であった。Bさんは、3年次に私が所属する文芸文化学科へ転学科した学生である。彼女の卒業研究は、出版流通の動向を見つめながら、新宿・歌舞伎町の元・カリスマホストが運営する書店を通して、現代社会における書店の価値を自分のコトバで論じた。心が強く、どのような環境下でも生き抜くことができるであろう。「都市の闇から見える書店の光」という題目が印象的である。Cさんは、私が初めてAO入試の面接官を担当した時の受験生である。確か高校3年生の7月だったであろうか。彼女の卒業研究のテーマは、聴覚に障害のある方々の社会参加である。聴力障害者情報提供施設(2機関)を対象に実地調査を行い、健聴者と共に生きる社会をつくるための「意思」を力強く論じた。リーダーシップがあり、ゼミ長としてメンバー全員を引っ張った。Dさんは副指導の学生である。声優のような魅力あふれる声を発する彼女の卒業研究は、「声と図書との繋がり」であった。私たちは機械が発する音に囲まれているが、朗読、おはなし会、口演童話など、人間が声に出して読むことで何が育まれていくのかを実地調査をふまえながら論じた。Eさんも副指導の学生で、福祉系学科の学生である。彼女は福祉系学科の学びを通して、発達障害の特性を踏まえた読書経験の調査に挑んだ。聞き取り

調査へも出かけた。誰しも人間として互いを認め合いながら生きる中で、「読書とは何か」を精一杯論じた。

この3月で大学を旅立った石川研究室の学生は5名である。

＊

この他にも、近代文学をじっくりと研究したFさん、日本語学の視角から本の帯に刻まれたコトバを調査したGさん、教育実習に全力投球しつつ紀友則を研究したHさん、情報系の学科にてゲーム制作をしたIさん、心理学系学科のJさん、Kさん……。ゼミに遊び来たり、研究室に飛び込んできたり、時にはお茶を飲み、時には図書館見学に行き、時にはアルコールを交え、時には甘いものを食べ、時には研究室でじっくり語りあった。彼女らの笑顔、つらい表情、疲れた顔、眠く機嫌が悪そうな姿勢——レポートや試験、サークル活動、イベントの企画、アルバイト、地域活動、ボランティア活動に追われながら、彼女らは皆毎日毎日全速力で走っていたことを思い出す。

卒業式当日、みんないい表情をしていた。

＊

ともに学びあう「教室」であろう！

お互いの問題意識を発見しよう。

答えのない問いに立ち向かおう。

自分のコトバで世界を表現する苦しさを一步一步乗り越えよう。

自分なりの見方を大切にしよう。

他者との相対において、自分の考えを示そう。

社会や現場と大学を往復しよう。

＊

石川研究室に入室する学生へ繰り返し伝えているコトバが、この箇条書きで描いた内容である。いささか偉そうな内容ではあるが、石川研究室での卒業研究はおおむね3年次の後期からスタートする。先行研究の動向を調べ、用語の意味を把握し、基礎的なデータをも集めながら、少しずつテー

マを定め、コツコツと研究目的を明確にしていく。とりわけ学生へ強調していることは——卒業研究とは一人で個別の作業ではなく、研究室のメンバーとともにデザインすることであり、卒業研究を提出することが目的ではなく、なぜそのテーマにしたのか、何を明らかにするのか——研究の意義や価値を大切にすることである。

＊

そんな彼女たちであるが、新入生として入学した当時は、まだまだ「高校4年生」のようであった。4月に行われる入学式や新入生オリエンテーションでは、大学生活への期待と不安とが錯綜する表情であり、背筋を伸ばして着席している。しかし、こんな緊張した大学生活も、5月上旬の連休が過ぎ去ると、多くの1年生はしっかりと足取りで大学へ通学するようになる。7月下旬の夏休み前になると、学生一人ひとりの個性が輝いている。とはいえ、大学生として勉学に充実する季節は、やはり3年次のゼミ配属以降であろう。卒業研究のみならず就職活動という長い長いトンネルに入り、自分を探し、自分を見つめ直しながら少しずつ前に進む。

＊

大学へ入学するには、2月頃の一般入試のほか、推薦入試やAO入試によって受験する高校生も多い。私は文芸文化学科の末席を汚す教員ではあるが、年に5～6回前後は面談を担当する。文芸文化学科では、国語科の教員免許状のほかに、学芸員と司書の資格を取得することができる。短い時間ではあるが、進路を悩み、自分の生き方をも悩み、しかし前向きに過去と未来を表現し続ける高校生と面談を進めていく。すると、司書の資格取得を希望する声が多く発せられる。司書課程も担当する私として、即座にその理由を尋ねると、単に「本が好きだから」、「読書が好きだから」ではなく、これまでに彼女らが出会った司書や学校司書の仕事、姿勢、人柄に惹かれたことを等身大の小文字で語りはじめる。まさにバトンは大学に渡されたのだ。

＊

学生が卒業後に進む道であるが、実にさまざま

である。しっかりと舗装された道路へと進む者、悪路ではあるがしっかりと足元を見つめながら前に進む者、遠回りではあるが山の向こうに隠れたゴールを目指して少しずつ前に進む者、まだじつくりとトンネルの中を進んでいる者……。もちろん進む道を決める前に、交差点や分岐があり、多くの学生は再び自分を探し、自分を見つめ直すこととなる。こうして前に進む彼女らの後ろ姿をみると、在学中に、大好きな図書館を取り巻く学びを通して何を得たのであろうか、と思う。高校から受け取ったバトンを社会へ手渡す立場として、学生に対して何を導くことができたのか、自分を責めてしまうこともある。言い訳となってしまうが、とりわけ近年は、大学内の学務が膨らみすぎてしまい、しっかりと授業の準備に向き合い、学生に寄り添う時間が少なくなってしまった。

＊

学生も大学生活を走り続け、そして教員も学生とともに走ってきた。教員は学生の魅力を引き出し、学生は教員の魅力を引き出してくれる。大学という空間においては、学生から実に多くのことを学ぶ。なんと贅沢な空間である。そんな彼女らが石川研究室を退室する際に、毎年一冊の絵本をプレゼントする。

『はじまりの日』（ボブ・ディラン作／ポール・ロジャース絵／アーサー・ビナード訳／岩崎書店／2010年）である。

＊

桜の蕾が開き、バス停全体が色鮮やかな季節になった。4月は新しい学生との出会いの季節である。今日がはじまりの日である。

＊ ＊ ＊

この連載によって、どのような方々と出会うのか——。

図書館に関わる多くの皆様が手にされる『本を選ぶ』に連載の機会をいただきましたこと、ご関係の皆様へ深く感謝申し上げます。大変拙い文章ではありますが、守秘義務と研究倫理をも念頭に、学生とともに走る教員の姿を息切れしないようマイペースで表現していきたいと考えています。

（いしかわ たかし：十文字学園女子大学）

# 日本の黒幕と呼ばれた男

—『伊沢多喜男 知られざる官僚政治家』—

大西 比呂志

政界の黒幕と呼ばれた人には、様々な人がいます。戦後歴代首相の「指南役」安岡正篤、ロッキード事件の小佐野賢治、目白の闇將軍田中角栄など。いずれも国民の目から見えないところで様々な人脈と資金を駆使し政治を動かした実力者として、ジャーナリズムの格好の対象となってきました。

あまり知られていないですが、かつて「日本の黒幕」とと呼ばれた伊沢多喜男という人がいます。そう呼んだのはカナダ人歴史家・外交官ハーバート・ノーマンです。ノーマンは「忘れられた思想家」安藤昌益を「発見」したことで知られていますが、敗戦後東京裁判が迫るなか、封建的な日本の統治構造の問題を追及するなかで官僚機構に注目し、そこに依拠して影響力を振るった伊沢という影の実力者を発見したのです。とはいえ伊沢は本当に一種怪しげな影の黒幕だったのでしょうか。これまで伊沢については、関係者による伝記以外本格的な研究はありません。本書はできるだけ史料に



『伊沢多喜男 知られざる官僚政治家』大西比呂志著／四六判上製／161頁／2019年3月／朝北社刊

もとづき、伊沢の官僚政治家としての活動と人間性を解き明かすことを目指しました。

伊沢は明治2年信州高遠に生まれました。兄は近代音楽教育の父として、初代東京音楽学校（現東京芸術大学）校長となる伊沢修二です。多喜男はこの兄を頼って上京し帝大卒業後内務省に入り、日露戦後から大正期に和歌山ほか各県知事、警視總監になります。

この時期は原敬率いる政友会が勢力を拡張した時代で、伊沢は原に抜擢されながらも各地で政友派と対立し、また内務省の本省や陸軍の連隊区司令官などとも「喧嘩」し、この熱血ぶりが藩閥の幹部大浦兼武の目に止まり囑望されるようになります。大正期後半以降は貴族院で少数会派を率い「苦節十年」の加藤高明を支え、台湾総督、東京市長に就任します。昭和に入り盟友浜口雄幸内閣ではロンドン海軍軍縮条約批准問題で枢密院突破に貢献し、満州事変、

515事件以降には新官僚の総帥となって軍部に抵抗し、日中戦争期には難局に当たる近衛文麿を叱咤し、枢密顧問官となった日米開戦時には東条英機首相の前で公然と開戦批判をしました。

このように伊沢は戦前の体制の実力者となりますが、進歩的学者吉野作造、反軍演説で有名な代議士斎藤隆夫、台湾議会設置運動を指導した林獻堂などを支援し長年交流します。友人から贈られた「怒庵」という称号、自ら愛した「頑爺」の雅号は、権威に反発し、抑圧された人々に理解を示した伊沢の側面を表しています。

伊沢は潔癖で倫理や道徳を重視し、簡素な生活を信条としました。しかしその一方で政界での多数派工作や裏面での妥協、ポストや利益の斡旋などにも深く手を染めます。伊沢のもとに残った膨大な手紙からは、就職の世話や陳情にこまめに応対したことがうかがわれます。これが伊沢閥といわれた人脈を作った要因で

しょうが、伊沢はおおよそ黒幕の冷酷なイメージとは異なり、喜怒哀楽ある人情味あふれる政治家でした。

伊沢は大臣就任を要請されても固辞し、また晩年地元高遠で持ち上がった自らの顕彰碑建立も断固拒絶し、結局「無字の碑」となって今に残っています。それらの理由を「僕は弱い人間だから」と述べています。伊沢は政治をこよなく愛しましたが、同時に自らの弱さを自覚し、政治を畏れたある意味で真の政治家といえるでしょう。

今日の日本において、伊沢のように体制内で少数派を貫き、時の多数派や権威を絶えず批判し、地位や名誉を遠ざけ、抵抗者への共感を忘れないような気骨と情のある政治家や官僚がどれだけいるのでしょうか。昨今の日本政治の体たらくぶりを見たとき、伊沢多喜男の生涯から国家と国民に奉仕する政治家が忘れてはならない姿勢を感じます。

（おおにし ひろし：フェリス女学院大学）



# 本読みと川原の散歩の日々

上野 勇治

ぼくが上京したのは、25歳になったばかりの1981年秋だった。ヤマハSR400というオートバイに乗って、その年の3月から印刷会社で働いていた大阪をあとにした。夏、横浜に暮らす大学時代の友人を遊びに訪ねたときに、こっちに来ないかと彼に誘われ、ああ行くよとあっさりと応じた。大阪にもどったその足で会社に辞めることを告げた。ただそれだけの理由でぼくは東京に出て来た。あてなどまったく持ち合わせていなかった。

友人は江崎満といい、パワフルでふところが深く熱い男で、いまは能登の山寺の土地に住み、この世の森羅万象を写すような版画をほり、土をこねて土偶や器をつくり生業としている。後年、彼の能登の暮らしや版画への思いを綴ったエッセイ集『星吐く羅漢』を港の人から出したが、当時彼の本をつくることなど想像だにできなかった。

ぼくにとってもっとも大事な人に出会ったのもこの頃だ。詩人の北村太郎さんである。江崎が横浜・山元町の南京墓地のほとりのアパートに暮らしていた北村さんと付き合っていて、おもしろくて傑作な詩人がいるからと紹介してくれた。この夏の出会いから、92年秋に北村さんが病気で亡くなるまで、ずっとながくお付き合いいただくことになったが、なにかとやさしく出来の悪いぼくの面倒をみてくれた。

ぼくは、小田急線の和泉多摩川駅を降り、多摩川沿いの土手の道を7、8分歩いたところにあるアパートの一室を借りた。山田太一の原作・脚本で、不倫する主婦を八千草薫が演じて話題となったテレビドラマ「岸辺のアルバム」の舞台となったあたりだ。部屋は玄関口に簡単な流しがついた6畳一間だった。こうして東京暮らしが始まったわけだが、すぐに働こうという気は起こらなかった。情けないことにさしあたり何をしたいかということも考えつかなかった。何処にも出かけず、

部屋で本を読んで過ごした。夕方には土手を越えて、ぼうぼう雑草が生え、ごろごろ石が転がって、びゅうびゅう風が吹きさらしているだけの川原をぶらぶら歩いてみる。駅近くの商店街に買い物に行き、銭湯に入って帰る。本読みと川原の散歩の日々だった。

部屋で繰り返し読んだ一冊に『尾形亀之助詩集』（思潮社）がある。「あるひは（つまづく石でもあれば私はそこころびたい）」。これは、彼の第三

詩集『障子のある家』の書名の横に添えられた言葉だ。尾形亀之助といえ、まずこのなまなましい短い言葉が思いうかぶ。つまづく石とは何だろうか。ころびたい？ 人は誰でも、ころびたくない、ではないか。「角笛を吹け」いまこそ角笛は明るく透いた西空のかなたから響いて来なければならぬのだ。が、胸を張って佇む私のために角笛は鳴らず、帯もしめないでゐる私には羽の生えた馬の迎ひは来ぬのであつた。」

（同詩集「大キナ戦」より）。

大阪の印刷会社が大学を出て初めて就職した会社だった。市内を車で走り、得意先回りや品物を配達する仕事は嫌ではなかった。その会社を半年で辞め東京に出て来て、何もしない。文学を読み耽り、多摩川の殺風景な川原をむやみに歩いて広い空を追った。さらさらとさっぱりとした真空にしているような心地だった。

しかしながく続けられることは出来ず、じきに音をあげてぼくは空気をもとめた。上京した頃の話である。

（後年、北村太郎さんの名詩集『港の人』を冠した出版社をつくり、エッセイ集『樹上の猫』、創立10周年記念として『光が射してくる』、さらに20周年記念として復刊した『港の人』と、北村太郎の書物を世に紹介させていただくなんて、ほんとうに有り難い。）

（うえの ゆうじ：港の人）



北村太郎『港の人』  
函の装画は岡鹿之助「古港」

# 鳥の目 73

—カワセミが幻だった頃—

## 為貞 真人

### 川辺の光

青い光の鳥に魅せられた少年の物語があります。第19回新潮新人賞受賞の図子英雄作『カワセミ』（「新潮」1987年7月号新潮社／1993年）です。小学6年の道夫をとりこにしたのは、翼をたたみ、キラッと閃光を放ち、鋭角の弾丸となって水面に突き刺さる宮下川のカワセミでした。

川幅が3メートルに満たないこの川は、集落の農家が散らばる小高い丘陵の裾をえぐり、下流に広がる田園を潤しています。川べりは集落の女たちの洗濯場にもなり、ハヤやマブナが群れ、ときには海から遡ってきたセイゴが白い腹を見せ小魚を追いつくこともあります。川のくぼみに群れつどう小魚を、カワセミが狙います。集落の人たちはこのカワセミを「ショウビン」と呼びます。

海辺の集落にはケヤキやエノキの巨樹が生い茂る森もあり、多くの野鳥が見られましたが、道夫には川辺のカワセミは特別な鳥でした。「緑青色の翼は青磁を溶かしこんでまぶしく映え、背中のはふさふさした紺瑠璃」の羽毛でおおわれ、胸から腹にかけてはふっくらした橙色です。とくに道夫の心をとらえたのは、背中の瑠璃色のピロードのような羽毛です。カワセミの身じろぎでさまざまに乱反射して妖しくきらめき、道夫は思はず身ぶるいがするほどです。

5月の午後、魚すくいからの帰途の道夫に、同級生の隆一が年下の竹司と組んで、無残に殺した青大将を振りかざして嫌がらせをしてきました。道夫と隆一は、1年前ささいなことで取っ組み合いの大げんかをして以来仲たがいの間です。蛇が苦手な道夫ですが、バケツを武器にどうにか追い払うことができました。

泥まみれで跳ねている魚をバケツに入れ水を満たして川の洗濯場まで戻ると、道夫の足はくぎ付けになりました。川面に突き出た柿の枝にカワセミが止まり、くわえたハヤの頭を枝に打ちつけたのです。動かなくなった魚を頭から飲み込んだカワセミは呼吸をととのえたとみえた瞬間、さっ

と枝を離れ、眼前を横切り、川藻の騒ぐ流れを断ち切って下流へ飛んでいきました。

### カワセミの巣

道夫の家では父が鳥好きでメジロを飼っています。高等農林を中退、農業学校の嘱託講師をしている父は、足の障害で召集を免れ、学校の勤労働員にも行かないですんでいます。母は60羽の鶏を飼い、卵の共同出荷で家計を助けています。道夫が川から取ってくる小魚は大切な鶏の飼料です。戦争末期、都市への空襲が激しくなっていました。

道夫は父から、ショウビンの正式な名前は翡翠（かわせみ）で、「翔ぶ宝石」と呼ばれていることを教わりました。カワセミは警戒心が強く、父も昔はずいぶん探したが、まだその巣を見たことがないとのこと。

そうしたおり、不思議にも道夫の家の庭先の崖にカワセミが巣づくりを始めました。崖の上は隣家のミカン畑で白い小さな花がびっしり咲いています。庭には梅や楓の古木やヒイラギ、サザンカなどが雑多に植え込まれています。カワセミのつがいのうち、一羽が崖の中腹に取りつき、錐のようなくちばしで土を掘っていました。その動作は間断なく、素早い。父は母と道夫に「巣づくりをはじめたからには巣立ちまで全うさせてやりたい」「絶対に脅したらいかんぞ。なるべく庭にもでんようにしてくれ」と厳重に申し渡しました。

カワセミは稲妻のように輝き、一直線に庭を横切って、直径7、8センチの巣穴の手前で速度を落とし、翼がつけ根からちぎれ落ちんばかりに羽搏いて低空飛翔し、すーっと巣穴に引き込まれます。ときには速度を落とし、まっすぐ入ることもあります。

### 消えた鳴き声

道夫は大声で「おーい、みんな来いや。ぼくここにショウビンが巣をかけとるんぞ」とふいちょうしたい気持ちをじっと抑えています。授業が終わると、走ろうとは思わないのに足がひとりで駆け出しています。はだしになり、足音を忍ばせて庭に出て木陰から巣穴をのぞき見ます。

田んぼに水が張られ、田植えの準備が進む頃には、

巣穴の入口付近は日ごとに白い液状の糞で汚され、かすかに生臭さを感じるようになり、巣づくりを始めて20日あまり、餌の運びが頻繁になっていました。「チイー、チイーロロ、チイロロロ…」とか細い鳴き声が聞かれました。道夫が巣立ちの光景を想像して胸がうずきます。

梅雨入りして間もない夜、鶏小屋でおびえたざわめきが起き、庭への侵入者に気づいた道夫は父たちに知らせ外を見ると暗い雨の中を見覚えのある二人の少年が逃げて行きました。巣穴のそばには燃えさしのマッチ棒が数本散らばり、短い竹の棒が落ちています。道夫は巣穴に耳を寄せましたが、奥はひっそりしずまりかえっていました。

翌朝、道夫は登校前にキンモクセイの木陰にうずくまって巣穴の様子をうかがうと、かすかな鳴き声がもれてきました。いつもの声でない弱弱しい声です。しかしひなが生きているのは確かです。

学校で道夫は隆一を厳しく詰問し、殴り合いのけんかになりました。ひりひりする頬を押さえながら下校した家の庭は昨日までとは趣が一変していました。さえずりも羽ばたきもなく静まり返っています。3日間、道夫は庭木のはざまに身を潜め、祈る思いで鳥の帰りを待ちましたが、6月の庭は道夫にとって「荒涼とした緑のむくろ」に変わり、巣穴は「癒されぬ深い傷口」になりました。(つづく)

(ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会)